

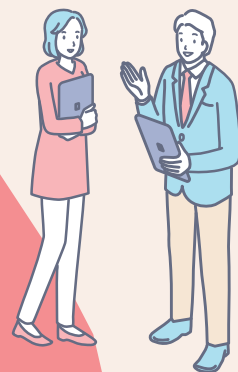
# 治療と仕事の 両立支援 ガイドBOOK

事業所向け



巻頭インタビュー

乳がん治療と仕事を両立  
中京テレビ放送  
恩田千佐子アナウンサー



他社の取組を参考に  
両立支援を始めましょう！

 愛知県

# はじめに

「治療と仕事の両立支援」は、病気治療や不妊治療を受けながら、働く意欲のある労働者が、仕事を理由として治療機会を逃すことなく、また、治療の必要性を理由として仕事の継続を妨げられることなく、生き生きと働き続けられる社会を目指す取組です。

2017年7月に、愛知県を含む地域の関係機関による「あいち地域治療と仕事の両立支援推進チーム」が発足し、関係機関が連携を図りながら、事業所における両立支援の取組を促進してきました。

これまで愛知県では、2018年度に「治療と仕事の両立支援フォーラム」の開催、2019年度・2020年度に「治療と仕事の両立支援取組事例集」の作成・配布、2021年度に「治療と仕事の両立支援セミナー」の開催などに取り組んできました。

しかしながら、2021年度に厚生労働省が実施した調査では、傷病を抱えた労働者が治療と仕事を両立できるような取組がある事業所の割合は41.1%に留まっており、このうち、79.9%の事業所が、取組に関して困難や課題があると感じています。

また、近年、晩婚化等を背景に不妊治療を受ける夫婦は4.4組に1組となっており、2017年度に厚生労働省が実施した調査では、不妊治療経験者のうち16%の方が仕事と両立できずに離職されています。

そこで、愛知県では、事業所における両立支援の取組をより一層促進していくため、「治療と仕事の両立支援ガイドBOOK」を作成しました。

本冊子では、両立支援に取り組んでいる事業所の取組事例、両立支援の進め方や疾病別の特徴・留意事項といった基礎知識、さらには、病気治療や不妊治療をしながら仕事を続けている両立者や支援団体の方々の声も幅広く掲載しています。

本冊子が、人事・健康管理担当者のみならず、従業員の皆様にとっても参考となり、事業所における両立支援の取組推進の一助となれば幸いです。

---

## 目次

### Contents

---

- 2 治療と仕事の両立の現状と事業所による両立支援の必要性
- 3 [巻頭インタビュー] 中京テレビ放送株式会社 恩田千佐子アナウンサー
- 7 事業所の取組事例
- 15 治療と仕事の両立支援の進め方
- 17 取組項目別 両立支援の取組例
- 21 疾病の特徴や治療に際しての留意事項
- 25 不妊治療と仕事の両立支援
- 29 “治療と仕事の両立支援”チェックリスト
- 31 あいち地域治療と仕事の両立支援推進チーム
- 33 相談先一覧／両立支援等助成金(不妊治療両立支援コース)

# 治療と仕事の両立の現状と 事業所による両立支援の必要性

## ■ 疾病を抱える労働者の現状(全国)

近年の治療技術の進歩により、これまで「不治の病」とされていた疾病においても生存率が向上し、「長く付き合う病気」に変化しており、病気になっても働き続けられる時代になってきています。

実際に、仕事を持ちながらがんで通院をしている人の数は増加傾向にあり、また、がん等の疾病を抱える労働者の92.5%<sup>※1</sup>が就労継続を希望しています。その理由は、家庭の生計を維持するためや、治療代のためはもちろん、働くことが自身の生きがいであるなど、様々です。

一方で、がんの治療や検査のために2週間に一度程度通院する必要がある場合、働き続けられる環境だと思える人の割合は37.1%<sup>※2</sup>に留まっています。

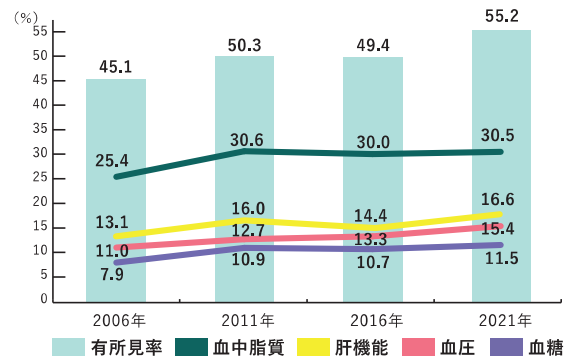
※1 出典：平成25年度厚生労働省委託事業「治療と職業生活の両立等の支援対策事業 調査結果」  
 ※2 出典：内閣府「がん対策・たばこ対策に関する世論調査(令和元年)」

## ■ 愛知県内の働く世代における疾病の現状

労働安全衛生法に基づく定期健康診断の有所見率は上昇傾向にあり、2021年は55.2%と、労働者の2人に1人以上に何らかの所見が認められています。さらに、県内において、2018年に新たにがんと診断された全世代のがん罹患者のうち、働く世代(20～64歳)の割合は、25.4%<sup>\*</sup>を占めています。

※出典：愛知県保健医療局健康医療部健康対策課「愛知県のがん統計(2018年)」

愛知県における定期健康診断有所見者率  
及び検査項目別有所見率の推移



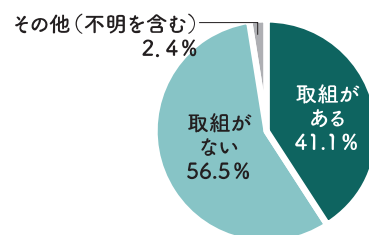
出典：愛知労働局「労働衛生統計(令和3年)」

## ■ 両立支援に取り組んでいる事業所の現状(全国)

厚生労働省が行った調査によると、傷病を抱えた何らかの配慮を必要とする労働者に対して、41.1%の事業所が通院や体調の状況に合わせた配慮、措置の検討など、治療と仕事を両立できるような取組を行っていると回答しました。

しかしながら、そのうち79.9%の事業所では、取組に関して困難なことや課題と感ずることがあると回答しています。困難なことや課題と感ずている内容として「代替要員の確保」、「上司や同僚の負担」といった回答が多くなっています。

労働者が治療と仕事を  
両立できるような取組の有無



出典：厚生労働省「令和3年労働安全衛生調査(実態調査)」

## ■ 事業所による両立支援の必要性

労働力人口が減少傾向にある中、今後、事業所による労働者の治療と仕事の両立支援が必要となる場面が、さらに増えることが予想されます。また、事業所が両立支援に取り組むことは、労働者の健康確保の推進、継続的な人材の確保、労働者の安心感やモチベーション向上による人材の定着・生産性の向上、健康経営の実現、組織としての社会的責任の実現、労働者のワーク・ライフ・バランスの実現といった観点から大変重要です。

そのため、事業所には、労働者ががん等の疾病に罹患しても、仕事を理由に治療の機会を逃すことなく、安心して働き続けることができるよう、治療と仕事の両立に向けた職場の環境整備が求められています。

## 中京テレビ放送

### 恩田千佐子アナウンサー

1990年中京テレビ放送入社。アナウンス部専門エグゼクティブ。ニュース情報番組『キャッチ!』メインキャスター。2017年に乳がんの手術を受け、2018年に復帰。2人の子を持つ母として、また闘病生活の経験者として、自身の体験談など等身大の情報を発信する。

仕事こそ、生きるベース  
帰る場所があるという安心感が  
治療を乗り越える原動力に

#### 病状の経過

- 2017年夏** 右の乳房に異変を感じ、8月に受診。がんの可能性があるととして、精密検査へ。
- 2017年秋** 診断の結果、10月に乳がんと判明。11月『キャッチ!』の放送で乳がんであることを公表。手術により右乳房全切除。
- 2018年1月** 抗がん剤治療開始に伴い、療養に専念することを決意(有給休暇使用)。以降、3週間に1回、計4回の抗がん剤治療を実施。
- 2018年3月** 『キャッチ!』のキャスターとして番組に復帰。約1年間に及ぶホルモン療法をスタート。女性ホルモンを抑える薬は以後、10年間毎日服薬。

中京テレビのニュース情報番組『キャッチー!』のメインキャスターとしてもおなじみの恩田千佐子アナウンサー。2017年11月の放送で乳がんに罹患していることを公表後、療養期間を経て2018年3月に復帰を果たしました。現在も、テレビ画面越しに見せるはつらつとした姿で、お茶の間に元気を届ける恩田アナ。自身の体験を通して感じた、治療と仕事を両立するために大切なことや、病と向き合う中で心の支えとなった仕事への思いに迫ります。

## 上司に宣言! 「手術後すぐ復帰」

医師から「がんの可能性がゼロではありません」と言われた時、初めて相談したのは『キャッチー!』を共に作っていたディレクターの女性でした。その時点ではまだ、「がん」と確定したわけではありませんでしたが、精密検査の結果がもし陽性だったら、治療など一連の様子を映像に収めて放送してほしいとお願いしました。それは、伝え手としてやらねばならぬという義務感というよりは、これから自分の身の上になんか起きるのか、どういう治療を受け、どのようにな心境にいたるのかを視聴者の方に伝えるのは「当然のこと」という自然に湧き出た思いでした。

がんの診断を受け、これからのことや働き方については、アナウンス部長や報道局の番組プロデューサーと随時相談し、その旨を人事部と調整をして

くれるという流れでした。

職場の同僚に報告した時は「がん」という響きからショックを受ける人もいましたし、番組はどうなるんだらうと不安を感じる人もいるなど、少なからず動揺が広がっていたと思います。

でも私の心が揺らぐことはまったくありませんでした。「手術後、ほんの少しだけ休んだらすぐに復帰する」。その思いを上司に伝え、周囲も私の意志を尊重してくれました。

## 抗がん剤治療に際し、 3か月の療養を決意

右乳房の全切除を行う手術中にリンパ節への転移が認められ、術後、抗がん剤治療を受けることを決めた時も、仕事は休まずに続けられるかもしれないという楽観的な思いがありました。しかし2018年1月5日の午前中に初めて抗がん剤治療を受け、その日の夕方くらいから、想像を超える吐き気や倦怠感に襲われ、それからは具合の悪い日が続きました。

決定打となったのは、髪が抜け始めたこと。頭髪がなくなってしまうことへの虚無感、脱力感…。体調の悪さも重なり、番組のプロデューサーと相談した上で、抗がん剤治療が終わるまでの3か月間は仕事を休み、療養に専念することを決断しました。抗がん剤治療は3週間に1回、4クール行われま

も落ち込んでいた様子が、当時の日記から伝わってきます。

それでも、リンパ節切除に伴う肩のリハビリのために整形外科に毎日のように通ったり、補完治療のためにビタミンC点滴を受けに行ったりと、毎日何らかの予定を入れて、お化粧をして出かけるように心がけていました。友人や家族が来てくれることも多かったのですが、誰にも会わない日というのはほとんどなかったと思います。

## 「あの場所に帰る」 その志が治療の励み

身体的にもメンタル的にも浮き沈みはありましたが、日々、自分を鼓舞できたのは、仕事に復帰するのだという情熱があったからこそ。テレビ画面を通して、後輩たちがしっかりと番組を守り、盛り上げてくれていた様子をとて頼もしく感じましたし、視聴者目線で番組を見ることで多くの気づきを得ることもできました。

もし、「がん」であることを会社に伝えた時、番組を降板するという選択肢を提示されていたとしたら、私は退職していたかもしれません。何よりも、私にとって「自分の居場所」の仕事がなくなることは一番の恐怖であり、「私はあの場所に帰るん



手術後、麻酔から覚めると娘が傍らに

だ！」という一心で、苦しい治療を乗り越えることができました。

## ●● 会社とのつながりが 心と生活の安定に

だからこそ今、企業の方、職場の方に訴えたいことは、治療中の社員が戻れる場所を確保してほしいということ。私のように、「がん」を告知されても「絶対に仕事に復帰するんだ」と強く思う方もいれば、先が見通せない不安に押しつぶされそうになる方もいらっしゃるでしょう。

とくに告知を受けた直後というのは誰しも動揺しますし、感情的にもなります。「完治するのか」、「職場の人から邪魔者だと思われないだろうか」、「仕事なんてきつと続けられないだろう」と不安や心配ばかりがよぎり、社会や人と距離をとって一人で塞ぎ込んでしまう方もいます。



(上)治療後「キャッチ！」初出演で復帰の喜びを実感 (下)医療用ウィッグに役立てるために4年近く伸ばした髪の毛をカットして提供

でもそんな時「本人が辞めると言うのだから仕方ない」、「無理して働くより、ゆっくり過ごす方が良いのではないかと」、退職する方向に導くことはしないでほしいのです。会社側から否定的な言葉を投げかけられると「自分はもう必要ない人間なのだ」と追い込まれ、病气と闘う気力さえ失われてしまいます。

患者にとって、会社との関係を保つということは、心理的な拠り所であるという側面に加えて、経済的な面での安心感にもつながります。

私の場合は休養期間中、振替の休日と有給休暇を活用。さらに傷病支援として会社が定めていた、期限切れになった有給休暇を使用できるという制度のおかげで、収入に関して心配することなく過ごせたのも大きかったです。

退院後も治療が続くことを考えれば、生活費や治療費なども不安要素になります。患者本人にも職場にも「仕事は続けられるもの」という共通認識が浸透すれば、治療と仕事の両立に対して、お互いにもっと前向きに臨めるのではないのでしょうか。

## ●● 患者の心に寄り添い、 働き方の相互理解を

3か月の抗がん剤治療を経て、『キャッチ！』のキャスターとして復帰できたのは2018年3月。抗がん剤治療後は、1年間くらいホルモン療法のための注射を打っていました。現在は、3か月に一度、

乳腺外科でマンモグラフィやエコー検査をし、女性ホルモンを抑える薬を毎日服用しています。この薬は10年間、2028年まで飲み続けなくてはなりません。

職場に復帰した時のことを思い返すと、まだ本調子ではない状態で治療も続いている中で「退院おめでとう、よかったね」と言われてすぐ違和感を覚えたという記憶があります。逆に仕事に本格復帰しているのに、必要以上に心配されることにも抵抗がありました。会う人、会う人に「どんな状況だったの？」、「治療は？」と聞かれて、同じ話を何度も繰り返すことも精神的な負担に。その時に感じたことは、職場に復帰するタイミングで病状や今後の治療のこと、両立のために必要な情報を職場の関係者に説明することで、相互理解が深まり、スムーズに職場復帰できるのではないかとということです。

「1週間に一度、この時間帯は通院が必要です」、「まだ疲れやすいので時短勤務でお願いします」、「適度に休憩をさせてほしい」など、希望する働き方や仕事への影響について職場の方々に周知する機会を設けるのも一つの選択肢かなと感じました。もちろん病気のことを周りに知られたくないという思いの方もいらっしゃるので、必ずみんなで共有しようという画一的なルールは必要ないと思います。

また、治療と仕事の両立を考える上で、患者自身が望む働き方も人それぞれです。例えば半年間しっかりと療養をしてから万全の状態復帰したいのか、社会とのつながりを絶たないように、短時



自身の体験をいかし、同じような状況に置かれた後輩へのアドバイスにも力を入れたいと話す恩田アナ

間でも仕事をしながら治療との両立を目指したいのか。本人が思い描く働き方のスタイルに合わせ、過去の事例や他社の例などを参考に、会社側からフローチャートなどでいろいろな選択肢を提示するというのも一案だと思っています。

大切なことは、職場の方が患者の声に耳を傾け、思いを尊重するということです。気持ちに寄り添い、望みを叶えるためにはどういう制度が活用できるかなどを提案し、道しるべを示してもらおうことで患者は救われ、前向きに仕事に臨めるはずですよ。

## フレックス、時短など、柔軟な勤務制度が鍵

「がん」に限らず、治療の内容によっては毎日通院しなくてはいけない期間があったり、翌日急に診療を受けなくてはいけなくなったりと、さまざまなケースが考えられます。そういう時にフレックスタイム制で勤務時間を流動的に調整することができたり、昼食時間などと組み合わせで中抜けをして病院に通えたり、体調が優れない時はこまめに休憩ができたりと、柔軟な勤務形態で対応してもらうことが、効率的な治療に役立つことも考えられます。

治療と仕事の両立を実現するためには、働き手と職場、両者の態勢と歩み寄りが必要です。「今まで通りできるか」、「できないなら辞めるか」という二者択一ではなく、互いに折り合いをつけながら、続けるための道を探ることが肝要だと感じます。

私にとって仕事は、人との接点を生む「生きるベース」のような場所です。治療中も仕事とつながっていることが常に励みとなり、安心感を与えてくれました。だからどうか、職場の方々には「辞めなくても大丈夫」と伝えてほしいのです。自分が求められている、帰る場所がある、社会とつながっているという気持ちこそが、病気に打ち勝つための最大のモチベーションになるはずです。

## 中京テレビ放送株式会社

所在地:名古屋市  
業種:放送業  
従業員数:281名

### 基本的な考え方

人事部としては本人の健康を最優先している。定期的に面談を実施し、体調面についての不安やコンディション等を共有するほか、部署単位でも、ストレスなく働けるように労働時間や休日取得など、本人の希望に沿う形で勤務調整を心がけている。

### 取組内容

#### ○フレックス勤務

始業・終業時間を各自のライフスタイルに合わせて決められる。社員の多くはフレックス勤務を活用しており、利用率は78%。無理のない働き方を選択できる制度。

#### ○年次有給休暇

10～20日の年次有給休暇あり。傷病の場合は、診断書の提出に基づき、有効期限切れの年次有給休暇の繰越し使用も認めている。